



第27号

(発行所)

真宗大谷派
松岡山 廣讚寺

中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341

上人の歌

朝夕拝読する御文のなかに次の一首がある。

かきおくも、ふでにまかする、ふみなれば、

ことばのすえぞ、おかしかりける

もう一首

弥陀の名を、ききうることの、あるならば、

南無阿弥陀仏と、たのめみなひと

さてこの二首はとても名歌とはいえないし、また蓮如

上人が歌をつくるべく思案しなされた形跡もない。前文

の御文の要旨をまとめればこうだよと三十一文字にまと

めて我々信者にお示しなされたものである。名文章家の

上人としては作歌力はどうでもよかったのかとかねてか

ら思っていたが、奥の細道の次の一文からこの考えを一

変した。

尋ぬ

『越前の境、吉崎の入江を舟に棹さして汐越の松を

よもすがら 嵐に波を運ばせて

月を垂れたる 汐越の松

この一首にて数景尽きたり。もし一弁を加ふる者は無用の指を立つるがごとし』

この一首は古

来、西行作との

ことであつたが

実は蓮如上人の

作とのことだ。

日本海の荒波と

古松と一片の月

を歌いこんだ力

量に感激した。

歌中の月垂れる

は、

杜甫の「星垂平野闊 月湧大江流」

蘇東坡の「杳杳天低鶻没処」

で大いに納得し浅学菲才を恥じた。



ガンジス河にて (撮影 寺西税)

住職童話

その日、お釈迦様は青い大きな岩の上で禅定に入られました。その場所はミツバチとサソリと蛇のあそび場でもありました。三匹は突然現れて自分たちの場を占領した大きなものに驚きました。そしてこれがどんなものかを調査することになりました。

ハチは上の方で小さな穴をみつけ「なかは真つ暗だ」といいました。サソリは足の裏をさすりながら「硬いところもあるが、軟らかいところもあるゴムまりだ」といいました。蛇はぐるぐる
と周りをしらべ、

「ちよつ
と暖かい
ところも
ある。生
き物かも」



といいました。三匹はお釈迦様の正面に座り翌朝まで相談をつづけました。

禅定を解かれたお釈迦様はすくつと立って歩き出されました。慌てた三匹はハチさんをみとどけ役にしました。お釈迦様はお花畑で手をかざされました。すると花の一つ一つがそちらを向きました。小川を通られると、元氣だねとおっしゃいました。川の中のメダカさんが集まってパクパク口をそろへあいさつをしました。

向こうから一人の農夫が朝つんだ花を抱えてやってきました。道に座り手を合わせ、つんだ花をお釈迦様の足元に並べました。お釈迦様は手を合わせだまって花の中を歩いて行かれました。

それを空からみていたハチさんには光のかたまりのようにはみえませんでした。ハチさんは仲間にならなかつた。「ピカピカで何もわからなかつた」と報告しました。

私の啓蒙けいもうされた詩紹介

妻よ 妻よ このままでいい

このままでいいから 生きていてよ

生きていてくれ 手をとったとき

ちよつとだけあたたかければそれでよい

妻よ 妻よ

死なないでくれ だって

今が一番好きだから

粒粒皆辛苦りゅうりゅうみなしんく
[2]

(都二)

(稲葉地ことは)

皆さんわかりますか。

- ① ごうがわく。ごうたがわく
- ② づつうなあ
- ③ くちなわ
- ④ かんこうする
- ⑤ まわしする
- ⑥ わやだわ
- ⑦ いかき
- ⑧ ひりようず
- ⑨ けなるい
- ⑩ でんがえる

※行事予定

六月十二日(土) 七時半 同朋会(役員は七時)

十九日(土) 二時 学習会

二十八日(月) 十時 二十八日講・女人講

七月十日(土) 七時 同朋委員会・例会

十八日(日) 六時半 納涼大会

金魚すくい・輪なげ・

ビンゴ大会など…

楽しい催しものがいっぱい。

どなたでもご参加下さい。

(雨天決行)

十九日(月) 九時 後片付け

二時～四時 学習会

二十八日(水) 十時 二十八日講・女人講

【20組行事案内】

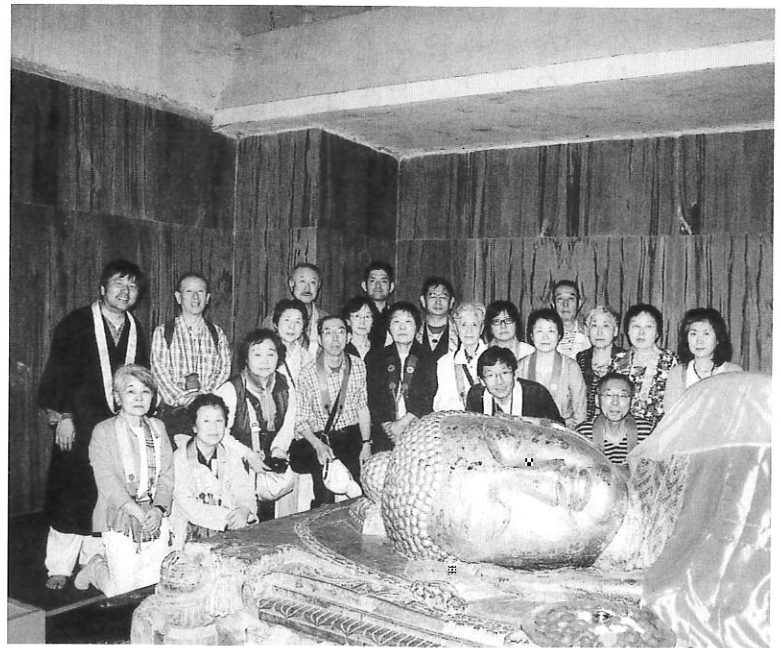
● 六月二十六日(土) 午後二時

名古屋別院 御遠忌お待ち受け法要

能楽「蓮如上人猿楽舞台」など 入場無料です

● 七月 三日(土) 午後六時五十分～八時

早朝法話 佐古前町 正晃寺にて



20組 インド旅行